

ダムに沈んでも魂は留まる

青森県むつ市川内町の野平^{のだい}開拓は、本州最北の下北半島にあり、日本三大霊場（他は比叡山、高野山）に数えられる恐山の西に位置する。

標高は200m程で、冬は極寒の山あいの土地である。

1949年、元満蒙開拓青少年義労隊、元満州開拓団、元樺太開拓団等の計78戸が入植した。満州や樺太で開拓に命を懸けてきた人たちが、日本に帰ってきて再び開拓魂に火をつけた。

今まで未開の地であった、この原始林に鋤を入れたが、言語を絶する辛酸の日々であった。

人里離れた土地で、川内町から25km以上離れており、営林署の森林軌道しか道が無く、農産物の出荷や生活物資の運搬にも困難を極めた。

初めは雑穀、ジャガイモ等の生産が主で、一時は鶏卵の出荷も行われたが、道が悪く出荷がうまくいかなかった。

66年によりやく開拓道路が開通し、75haほどの水田が造成された。また、大根の契約栽培や、肉用牛生産400頭など、軌道に乗ってきていた。

しかし、入植して20年ほどして、国が勧める経営適正化に伴う離農対策事業で、半分以上が離農してしまった。

さらに、71年より川内川上流ダム建設計画が持ち上がった。この地を流れる川内川は、度重なる集中豪雨などで毎年のように氾濫し、抜本的治水対策が求められていた。

ダムができれば、開拓地の多くがダム湖に沈むことになる。残っていた8戸は苦渋の選択をする。

81年7月15日に離村式が行われ、記念碑「留魂の碑」が建てられた。碑には「30年に亘る^{かんなんしんく}艱難辛苦の血と汗の^{にじ}滲む青山の地を、未来永劫に湖底に沈むるは真に忍びざるものあれど、川内町勢伸展の大義に涙を飲みて同意せるものなり」とある。

みんながこの地を離れようとも、36戸の開拓魂は留まっている。

川内ダムは、94年に完成した。

野平（のだい） 02-208-1

①調査日 令和元年7月26日

②所在 むつ市川内町

③地区の沿革 本州最北 下北の原始林に79戸が昭和24年に入植した。

④設置年月日 昭和56年

⑤設置者 入植者

⑥碑文（表面） 留魂の碑

竹内 俊書

吾等曾て満蒙の大陸に朔北の樺太に雄飛するも、敗戦の憂目に会い、再びに踏まずと誓いし故国の地に憔悴傷心を抱きて還る。本州最北、下北の深奥に往昔より斧鋤を知らざる原始林の地あり野平という。吾等この地を三度青山の地と定め鋤を入れし者左の如し。時正に昭和二十四年なり。元満蒙開拓青少年義労隊五戸 元満洲開拓団 山形団体六十一戸 元樺太開拓団十二戸 爾来昼尚暗き原始林開拓に言語を絶する辛酸の日々を刻み、耕地となりたる後も、朝に星を頂き夕に月を仰ぎて耕やす様は、野平小中学校の校歌に歴然たり。

入植二十年にして漸く生計の基礎成りたるも、折しも国の勧める経営適正化に伴う離農助成策に前途に光明を見ることなく、止むなく離農せる者四十二戸あり 寂として声なくこの地を去る。残れる三十六戸、変転する農政下に愈々志を固くし畜産に畑作に協業共同経営化を推進し、大いにその実を上げ将来を展望せんとする時たまたま川内ダム建設の議成り、朝野挙げてその完成を期きんとす。紆余曲折を経たるも、吾等野平住民は、三十年に亘る艱難辛苦の血と汗の滲む青山の地を、未来永劫に湖底に沈むるは真に忍びざるものあれど、川内町勢伸展の大義に涙を飲みて同意せるものなり。

今吾等それぞれに新天地を得て、野平開拓三十年の歴史を閉じるに当り、陰に陽に温情支援を賜わりし関係者各位に、万腔の感謝を捧げ今後その恩義に報えんことを心に誓う。

いつの日か、満々と水を湛え、吾等開拓民の苦闘の跡を鎮める山上の湖畔に、往時を忍びよすがと、併せて野平に任せし三十六戸の開拓地を留めこの碑を建立する。 昭和五十六年 盛夏

⑦碑文（裏面） 入植者36名の氏名

協賛 川内町長 菊池十一 佐井村長 松谷清治

撰文 菊池十一 書 阿部勝馬

⑧現在の状況 下北 野平（のだい）高原に位置する開拓地で、近隣に野平高原キャンプ場などがあり、耕作地や営農集落も散見されるが開拓の面影は薄らいでいる。記念碑は道路脇の草地に花壇に囲まれ設置されていた。